

講 座 · 史 料

史 學 研 究 法 (二八) 小 林 秀 雄 譯

異 國 日 記 (二) 辻 善 之 助 校 訂

小林秀雄譯 史學研究法目次摘要

第一篇 緒論	一 (一卷一號)
第二篇 方法論	一一九 (三卷五號)
第三篇 史料篇	一八一 (四卷五號)
第四篇 考證篇	二八四 (六卷三號)
第一章 眞僞の鑑定	二九二 (六卷五號)
一、僞物	二九三 (六卷五號)
二、誤謬	三五二 (七卷四號)
第二章 史料の外的決定	三七一 (七卷四號)
一、史料製作時代の決定	三七二 (七卷四號)
二、製作場所の決定	三七九 (八卷一號)
三、製作者の決定	三八一 (八卷一號)
四、史料解剖	三九三 (八卷一號)
第三章 校正及び修正	四三一 (八卷六號)

六第一五三頁註のクルエの駁論に、この問題の決定には先づクルエの年代記の編纂時代に關する假定の検査が必要であるといふ注意をしてゐる。この注意は明かにこの傳と年代記の如き非常に明瞭に、また一般に確實に之に關係してゐるとされてゐるこの史料の從屬性については、製作時代を確定しなければ明白にはなり得ないといふ主張を含むものである。然しかゝる主張を眞面目に正直に考へると、之によつてドイツ史料に於ける史料考證的作業及び校訂の大部分、悉く最大部分、またその機關たる新報は基礎を失ふこととなる。何となればかの作業の多数はその史料に關して傳へられた、或は精密に推論された製作時代により、全然史料解剖の論據の上にのみその從屬關係を定めてゐるからである。その間にプレスラウ(ハー・プロツホのゲツチング學藝指針、紀元一九〇一年第六一號第八九〇頁註を參照せよ)は私の結果の正當なることに一致したが、なかなか問題となるべき原則の承認はしない。然しこの範圍にある無政府を幫助せしめない爲には、之を隱昧にして置いてはならない

B 今第二に、吾人は親似史料として認むる提出せられてゐる史料が如何なる方法に於て關係してゐるかを確定することを取扱ふ。

關係の非常に種々な種類が可能であり、また従つて研究の方法も相當複雑である。吾人は種々なる場合に於ける方法の適用をば具體的な例を以て組織的連絡を以て記述することが最良の仕方と思ふ。吾人はこの例を特に二三の中古(第十一―十二世紀)の年代記的史料から選出するが、之は次の理由よりして現れて來る標準を最印象的に示し、且つ最明瞭に認識せしむるによる。私は史料從來考證的研究に於ては文獻的用法であるが如く、之を簡單にその初の文字により、B、M、N等と記す。私はまたその説明の爲に時々普通の系圖的系統の種類によつて親似關係の圖表的記述を試みる積である。重要であり、看過するを許され得ない二三の一般的注意はこのB節の終に擧げることとする。

R 及び M なる史料がその内容及び表現に於て、此等のものが之に關係して居らねばならない様に一致してゐる。此等の中の一方が他方の史料であると假定すれば、此等の何れが根本史料であり、何れが他のものから引用されたものかといふことが問題になる。

(a) 二つの史料の間の關係

R と M なる史料がその内容及び表現に於て、此等のものが之に關係して居らねばならない様に一致してゐる。此等の中の一方が他方の史料であると假定すれば、此等の何れが根本史料であり、何れが他のものから引用されたものかといふことが問題になる。

(1) 兩者が文字通り全然、互に一致してゐる場合は、當然一般に何人が寫手であるかは決定し難いが、只一方の史料の中に多少他と一致してはゐるが、之が只一方にのみ適合して居つて、從つて疑ふ可らざる筆寫の事實を洩してゐるとき場合がある。かくて M は紀元一〇六年度の初部分をは R の筆寫したものであることを洩してゐる。假令かの作者は從來 R の政治的見解を分つてゐて、ハインリッヒ四世皇帝が教會に反對して争ふてゐる間だけはハインリッヒ五世の父皇帝に對する態度を正當であるといふ様には書いてゐないのであるが、父皇帝が法王の命令に完全に服従したことを物語つた後の所には R と同じ詞で「而して假令非常に遍歴をしたが、平和になつた時にもそこに居らず、孝道をなすことをせず」といひ、その子供の繼續的反逆に對する批難をしてゐる。この詞は單に R の傾向には適合してゐるが、M のそれには適合してゐない。

(2) 通常一致してゐる文句の中に相違があり、之が二つの親似してゐる史料の間の關係を説明するが、殊に誤解、文

體的及び内容的變更、追加、或は削除があり之を説明し得るものである。

吾人が二つの史料の一方に、他方の表現及び表示の明白な誤解を發見する場合、之によつて當然後のものの優先順序が直に明白にせられる。二つの言語の史料のある場合、或は二つの史料の何れが下圖か、草案か、復寫か、正文かが疑はしい場合、屢々この徵證によつて優先順序が認識される。

假令はループレヒト王のオーストリア公レオポルドへの訓令(ドイツ議會法文卷四第四二七頁第十一行にある)に、山を超へ、彼の國土を通つてブリクセのラムベルテンに行くにはどの道が最も良いかを王に知らせよとある。マルティヌ・マルティヌのこの訓令のラチン文にはこの所に *De vine optime sint versus Bressium et Diebestan* その最良の道はブレスチウム及びディーベストンの方にある、といふてゐる。ディーベストンが上イタリヤの土地であるとしたこの誤は彼の譯文の土臺となつたドイツ文句の誤解であると考えられる場合にのみ説明されるのであり、ラチン文がドイツ文の譯であることが明瞭にされる。ドイツ史料ドイツ年代記卷二のザクソン世界年代記は幾多の校正本があるが、このある筆蹟の群に、紀元一〇四〇年(ドイツ史料一、C. S. 第一七二第二六頁)の條に *De Ungare vorheren in den tiden enen koning Iselene unde saten enen Oren* 則ちハンガリヤ人がその時代にその王ペーテルを驅逐し、或オボなるものを任命したと讀まれる句があるが、之は同時代の史料によれば全然正當である。他の筆蹟の群には、この所に *De Ungare vorderen usw. unde satten in in einen oven* 即ち暖爐の中に彼を置いたとなつて居り、後の解釋は初のものから引用されたものと假定する場合にのみ、この誤解が明瞭である。その土臺となつてゐるラチン文のビルデル年代記 *Föhrler Annalen* 6 *Ungari querant Oronam in regem elegentes petrum reputant* ハンガリヤ人にオボを王に選出しペーテルを驅逐した、の句からは、決してかゝる喜劇的な誤解は成立し得ない。(ゲッチツゲン王立科學會研究卷十二、歴史及び言語學部第十一頁のゲー・ワイツの文を參照せよ)

かくて吾人は一つの史料が他のものから引用される場合、後者が存在してゐなくとも屢々之を認識することが出来る

る。假令はフランスの歴史家ジャン・モリネー Jean Molinet が偶然マキシミリアン一世とミラノ婦人ブランカとの結婚についてその代理者の契約に「レギスと名付けられてゐる」"homme Regis" 代理者の一人が王を代表したといふてゐる。然しこれに關する古文書によつて知られる代理者の何人もかゝる名を有つて居らない。かくしてモリネーはラテン語の前史料の王の名を以て *nomine regis* が任命なる語を誤譯したものと假定せなければならぬ。

(3) 文體的變更は親似關係を指示することを得る。その例として R 及び M の紀元一二二三年の條を觀察して見る。

R

Fredericus archiepiscopus Bremensis obiit 3 Kalend. Febr.,
 eiusdem Adelbero, Reinardus Halverstadensis episcopus
 obiit 3 Kal. Martii, cui successit Otto. Heinrich marchio
 puer veneficio interit. Ludovicus comes obiit. Theodericus
 episcopus Cister. occiditur cultro a quodam infra anulum
 templi. Otto comes obiit pater Adalberti marchionis.

M

Fredericus episcopus Bremensis obiit 3 Kal. Febr., cui successit Adelbero. Obiit etiam Reinhardus Halverstadensis episcopus Kalendis Martii, cui successit Otto. Heinrich marchio juvenis veneficio interit. Item obierunt Lotovicus comes monachus factus et Otto comes de Palenstede. Theodericus episcopus Cisterciensis, Adalbertus marchionis.

R が根本の觀察であることは疑はれ得ない。個々の事實が結合また排列の試みなく書き下されてゐる。M に於ては *etiam*, *item* などの接續詞により幾分結合が行はれ、また二人のグラフの死が結付けられて居つて、文體的改善を目的とし、また之に依つて前史料 R に對して説明し易い變更がある。而してまた R の作者が M を前史料として利用したとすれば、之を彼の本文に見られる如くに變更するに至るべきかは説明し難い。

かくて吾人は一般にかくの如く結論するのである。即ち二つの親似史料に於て、一方の言語、文體權造が流暢で純粹で、圓滑で、整然として居り、他の方は不手揃で、矛盾多く、不秩序である場合、初めものは後のものから引

用されたものである。何となれば作者が前史料に現されてゐる立派な文體を更に悪くするといふことは多分らしくなく、却て作者が前史料の不十分と思はれる文體を改善することは甚だ自然であるからである。最もこの際翻譯者が十分熟達してゐない外國語による翻譯の如き、作者が前史料に加へた事實上の變更或は敷衍の如き、また直ちに次に示す如く、宏大な史料には大低認め得られる偶發事件の如き、明瞭な文體改惡の關する目的或は原因は別としなければならぬ。かゝる理由なくして、單に校訂者の未熟によつて、前史料の文體が一度、然し全く除外例的ではあるが、全く個々の行に於て改惡されて、之が爲に大に人を誤らしむることがあり得る。

前史料の文體的變更の具體的の例は、特にドイツ史料卷一、近くエフ・クルツェによつて第四二二頁に擧げられてゐる校訂にラウリッセン年代記が所謂アインハルト年代記に先立つかといふ後世の作家によるかの書の研究である。またジーベルの歴史學雜誌紀元一八七九年新篇卷五第三九二頁にあるハー・プレスラウの研究に於ける所謂ペーテル大帝遺言狀の二つの譯文を参照せよ。

(4) 内容的變化は必然二つの史料の關係に關する最明白な結論を與ふる。假令は吾人が注意して親似史料たる R と M との年代記でバイリッヒ四世の歴史を讀むと、M の作者は法王黨であるのみならず、反逆者たる彼の子供の黨人であつて、皇帝の極端な敵であることが判るが、R の作者は皇帝が法皇に對して戰つてゐる間だけは皇帝を批難し、且つ斷然ハインリッヒ五世の不孝な反逆に反對を表してゐる。既に述べた如く、此等二人の記述家の一人はこの時期の記述たる他のものを寫してゐるのであるが、自分の傾向に應じて之を變更して居り、また必然その變更の種類からして何れの側が根本の觀察であるかが認め得られる。吾人は今例として紀元一一〇六年の條の次の文句を

比較する。

R	M
Nam inter ceteras ejus (Heinrici IV) miseriae in calamitates accesserunt quidam maligni, omni levitate Crudentiores, manu valida occupare Leodivum, ubi tunc pater (scilicet Heinricus IV), profugus, omnibus suis despoliatus et regno destitutus consoleretur. Adjutores vero patris usque.	Nam inter eorum dissensiones accesserunt quidam manu valida occupare Leodivum, ubi tunc pater consederat, jam regno destitutus, pauciores vero patris usque.

Rの記述は自由に作者の傾向を現して居るが、Mの作者は出来るだけ、自分の傾向に應じて、かのものを變形してゐることが容易く判る。何となれば、彼は皇帝に對して同情を有たないので、

dissensiones stulti *Miserias et Calamitates* といふてゐるが、彼は動詞の *accesserunt* を主持するが爲に *dissensiones accesserunt* といふ無器用な接續をしてゐる。この接續はMが根本の觀察を供すると假定するならば全然説明されなくなる。吾人は同時にこゝに序に文體の破毀が特別な原因より生じて、かゝる證明力となる場合を述べる。Mに於て *quidam* といふ詞が非常に不定に動いてゐるが、之は正しくMの傾向に適せずしてRに親しい詞を削除したものと思れば、漸く明白になる。他の文句については、Mの作者も前史料の傾向を完全に放棄することが出来ず、従つて彼はその不適當な一致によつて前史料を洩してゐるのである。

同じ方法で、全然奴隸的な寫でない場合は大抵寫手の個性を指示するが、ことに吾人の例に示した如き事情の下には變更した人をば積極的に認識し得られる位である。

(5) 追加及び削除が特に觀察を要する。Mの史料をRの史料と比較して、一致してゐる文句の中に、ある増加が示されてゐるならば、これは結局二つの違つた種類から成立したものである。Mが作製の際にRから或物を加へたか、或はRが作製の際にMから或物を削つたかである。今文體上の増加或は減少、即ち擴大的裝飾或は完成及び表現の簡單な收縮に關しては、何が根本的のものかといふことはさうに與へた注意の標尺によつて決定される。事實上の増加或は減少については、最多く、完全で、精細な報告を含んでゐる史料を第一のものとして考へることが、一般に不正とは思はない。ことに完全な作物と非常に簡單な作物との間に、諸處に文字通りの一致が發見される場合、完全な作物の作家に内容的に簡單なるものが或物を供給し得べきでないから、この作家がまたその文字通りの表現を用ふることは多分らしくなく、而して反對に完全な作物の内容を引用した作家が屢々その表現をも取り入れることは十分明かである。

アインハルドのカロロ大帝傳とカロロ帝年代記との關係に關する事柄は之であつて、之については歴史季刊誌紀元一八九六年卷三の第四二二頁にある私の論文を參照せよ。私はその第一七四頁に個々の文句を擧げて例證してゐる。

然し吾人は反對に詳細な史料が特有の、或は借用の知識を利用した乾燥無味な史料によつて補足的に、また擴大的に引用され得ることを常に承知して居らなければならない。

二つの偶然性の何れか。即ち一方への追加による増加か、或は他方への削除による減少かの決定は幾多の徵證によつて注意深い觀察者には明瞭にせられ得るものである。

ことに常に追加によつて根本の本文が不適當に破毀されるが、之に反して追加のない史料に於ける整然たる關係はそこには追加が故からないのであつて、削除されたものでないことを示すものである。之によつて吾人はまた必

然前史料の存在してゐない個々の史料に於て作製の痕跡を認むるを得る。ことに吾人が本文からのある文句を考ふるとして、他の本文の文に更に良好な内的及び外的關係が生ずる場合、かの句はそれが土臺としたる前史料への追加を表現するものと結論しなければならぬ。而してこの結論はこの文句が他の本文の文句と違ふ個人的色彩を有する場合には十分な證明力を得る譯である。最もこの個人的色彩は利害圈に關するとも、黨派的傾向若くはその他の性質に關するとか何れにしても差支はない。

之と反對に、大きな本文からの再修の場合の如く、削除によつて明白に簡單な約説の結果として認むべき輕微な不精密及び間違つた報告が成立する。また再修の際に度々省略的文體には明かに適合しないが、詳述的文體には明かに其所を得てゐる如き文句や文章などを伴ふことがある。

吾人は二つの史料に於て他の一致せる報告の外に、一方の側に他方の史料からの規則的に反覆された増加或はある明白な特別な性質の増加がある場合、増加、或は削減に關する決定は、非常に確實に適中し得る。この場合吾人は他方の削除でなくて、一方の追加を確定せねばならない。之は他の史料が原則的な選擇によつて總てかの文句を削除したとは假定し得られないからである。次の具體的の例は之を明瞭ならしむる。既に屢々引いたマグデブルグ年代記(M)に於て、ローゼンフェルド年代記(R)と同じ文句の外に規則的な増加があり、ことにエツケハルト年代記からの再修がある。この再修の一つはRにはなく、之はRがMから引用され得ないことを確實に證明するに足る。之が場合であるならば、Rは偶然に、或は故意にエツケハルトの文句を省略したに相違ないのであるが、之は不可能なことである。この報告の中には總ての年を通して省略がたえず報告されて居つて明かに偶然の範圍を超越して

ゐるのであるから、偶然とはいはれない。また第一にかゝる目論見は意味がなく、第二に今日の研究家の如くに年代記家はMのいかなる文句がエツケハルトに關係してゐるかを知り得ないのであるから、その故意でもあり得ない。吾人は再修を作り出した史料が知り得られない場合、只先き述べた注意の標尺によつて、これがかゝる再修であるといふことを知り得れば、この結論はかゝる證明力を有する譯である。一方の史料の増加がある特質を示す場合、他の上記の場合の決定が全然間違なくはないが、或程度で確實であることは次の例が明にする所である。Mには上記のものゝ外に、Rに發見されないマグデブルグ地方報告の規則的な増加がある——この場合、それだけでRが選擇により、また目論見によりてこの文句を削除したといふことは實際不可能である。實にこの文句はどこまでもそのマグデブルグ的色彩によつて認められるべきでなく、また當然Rがマグデブルグの事件には興味がなかつたと考ふべきである。然し實際この問題は類似の場合に於けるが如く、かゝる種類の確實な削除に關する積極的標準點が與へられてゐる場合にのみ、特に採用さるべきものである。

追加或は削除を假定する決定のこれ以上の標準は、かゝる二つの可能性の一つに關して積極的理由が認め得られる場合に得られるのである。假令ば吾人が上記の例に擧げたMの文句から或人Meinertの詳細な記述を削除する立派な理由を認め、同様にMが先きの文句にRに對してバレンシテットのそれよりもグラッフ・オットーの詳細な記述に増加を示す立派な理由を認める場合、MはRの如くにその讀者に詳細な知識を假定してゐないので、この追加をしたと假定し得る理由がある。或はアインハルトが彼のカロロ大帝傳に教會々議及び彼の主君の教會政治に關する報告をしないのは、彼が材料を得た帝國時代記といふ前史料があつた爲めで、かゝる材料の削除はこれに關する趣味及

び理解等の缺乏によることが判る。

(6) 勿論個々別々な現象として、AとBとの二つの史料がそれぞれ違つた校正に依つて相互に別々に作り得られる。時々之がまた他の指示によらずしてその解剖的取扱によつて認められ得る。精密な試験をすると、Aが必然的にBから取つたに相違ないと同時に、Aの中にはBが之をAから取つたに相違ないといふ根本的觀察を示す他の文句をも發見し知られる。

(b) 三つの親似史料の間にも非常に違つた從屬關係が可能である。

(1) 史料の二つが第三者から作られる場合。この場合三つの史料の各が二つの他のものの史料であり得、而して常に之が二つの種類を作るが故に、全體としては五つの結合が出來得るがこの最後の三つの種類が方法學上違つた關係を現す。それはこの問題の方法的取扱は同一であつて、この三つの史料の中のどれが他の二つの史料の引用した原物であり得るかといふことなるからである。従つて吾人は只かの三つの關係を觀察するを要する。かくて吾人は提出されてゐるE、M、Sの三つの史料について、Eが二つの他の史料に對して原物として示されるものと假定すると――而して之はa節に書いた取扱の標尺に従つて證明されねばならない――MとSとがそれぞれ直接にEから引用したか或は彼等の各が他のものの媒介によつて、關切にEと關係を有するかにより、全體として次の三つの可能性がある。



この關係の或者、而して三つの中の何れと假定すべきかは、三つの史料に於ける一致せる部分中の相違點の觀察

によつて認められるのである。

紀元一〇九九年の條にかう書いてある。

E	M	S
Cinomatius vero causam rebellionis suae paucis tantum sibiique familiarissimis in regno delegens assumpto quodam ex ordine ministerialium patris, acque adnotatum et prudentio viro, per quasdam Italicae partes et nomen et dignitatem regis annis fere 9 obtinuit.	Ipsae vero per quasdam Italicae partes et nomen et dignitatem regis anni fere 9 obtinuit.	Conradus vero causam rebellionis suae paucis in regno sibiique familiarissimis delegens assumpto quodam ex ordine ministerialium patris, acque adnotatum et prudentio viro, per quasdam Italicae partes et nomen et dignitatem regis annis fere 9 obtinuit.

この場合上の報告の現れてゐる形式はMよりSに近いが、或は見られる如く、SがMよりEに近い結合を有するものと判る。かくてこの報告はの媒介によりてSに入つたのではなく、却て全く直接にEから來てゐる。かくて上に圖示した關係の最後のものであると結論される。また第二番目に記述されてゐる關係を結論するには、MがSよりEに近い結合を有する文句を發見しなければならないが、かゝるものは、假令ば紀元一〇七四年の條に發見される。

E	M	S
Beatus memoriae Alexandro papa defuncto, Ildebrandus, qui postea Gregorius V I, dictus est, professione	Beatae memoriae Alexandro papa defuncto, Ildebrandus, qui Gregorius dictus est, professione monachus et	Ea tempestate bonae memoriae Alexandro papa defuncto, Ildebrandus, qui et Gregorius VII, dictus est, pro-

monachus et archidiaconus, Romane secl successit, sub quo Romana res- publica et omnis ecclesia novis et hauritis scientum erroribus periclitari cepit.	archidiaconus Romane secl successit, sub quo Romana republica et omni ecclesia novis et enutritis scientum erroribus periclitari cepit.	lesione monachus et archidiaconus, Romane secl successit, sub quo omnis ecclesia enutritis scientum erroribus periclitari cepit.
---	--	---

前者と同様に、MはSからでなく、却て直接にEからEに近く結合してゐる形で、その報告を作り得たといふことが起る。之を正當に明瞭にする爲には、只MがSからその報告を取つたことを示さねばならない。その場合、Mが偶然Sからの本文にEが挿入したと同じ行に同じ詞「ローマ共和國」「Romana republica」及び「novis et」を加入したと假定すべきであるが、之は明かに正確性を超越した偶然である。互に獨立して一つの史料を寫す二人の作家が同じ相違に陥ることは一二回は現れ得ることであるが、それが度々繰返され、またその相違が特殊の用語或は總て一致してゐる文章の内に存する場合は、總て人間の經驗上偶然とは認められなくなる。ことにこの種の反證は常に其鑑査を助くるを見る。

かくてこのEに似た報告をば、MがSから、またSがMから作らなかつた場合は、只最初の関係のみが可能である。即ち兩者が直接にEから作つたのである（之は直ちに次の部分に説明される如く、この外にもなほ複雑なものがあることを示す）

吾人はかくして一般的に、三つ親似史料の中二つが第三者に對して、或はそれらの一方が第三者に密接に一致し或はそれらの他方が第三者と密接に一致する場合、兩者は直接に第三者から作られたものであると言ひ得る。

フィツケルが一、C.第九四—一二八頁に一媒介關係として記述し、而してドイツ民族法の範圍に關して説明してゐる場合の事件は方法的には之と異なるものでない。彼は第一二九頁に彼自ら此等の結果、即ち同じ取扱を行ふてゐることを示してゐるが、種々な作物或は原型の種々なる筆蹟の親似關係の決定に際しての説明にかゝる一致法を使用してゐない。多數の法典の異本の判定に際しても屢々かゝる場處があることで、a 法典では忠義を *bonitatem* (*Treuschule*)、b 法典では *bonitatem*、c 法典では *bonitum* とよみ、これら總て三つのものが互に相違してゐるが、精密に考へると正しく上述の例の如く幾分一致せる状態の中に相違があり、ことにこの状態はbが實にじから、またcがりからその讀方を得たのではなく兩者がそれぞれの讀方をaから受けたもので、之が明白にかの二つの違つた讀方の共通の成分を與へて兩者に取つての媒介形式をなせることを證明してゐると考へられる位である。この例ではこの結論は屢々一方の讀方（こゝではa）がこの關係に於て獨り適合する意味によつて助けられるのであり、フィツケルが一、Cに取扱ふ法文の關係の範圍では、この結論が他の要件に助けられてゐる。假令ば法文の一方が他方に對し法律發展の一般經過に應じて假定される確實な優先關係がある如きことである。かゝる要件は取扱はれる史料或は文句の性質によつて違ふもので、先在關係の認識を容易ならしめ確實ならしむるを得るが、之が史料考證的取扱其物を變更することはない。

吾人はSがEからの報告をMの媒介によつて得た場合、或はMか之をSの媒介によつて得た場合、この節の初に記した他の二つの關係を如何に認むるか。吾人は既に特に上に記述した證明手續の經過に於いてこれが答を與へた。即ちSがEからの報告をば、EよりはMに近い結合を有する形式で取入れた場合、SはEからでなく、只Mから直接に有するを得るべく、またMがSに現れてゐる形式に非常に近いEの報告を含む場合Mも同様である。第三者に對して史料の二つのものの中に共通の削除及び缺陷が発見され、これが二つのものに於て偶然であり得ないもので

ある場合は當然非常に近い形式として考へられるが、かゝる缺陷は殊に筆寫及び校正による文書の副本の場合に現れるものである。さてSがMによつて、或はMがSによつてEから變化した報告を得たかはaの取扱方の指示によつて決定されるが(二つの史料の間の關係)この場合、之は完全に一致してゐる文句、かくてまた全然一致してゐる缺陷によつて規則的に認められないことを思起さねばならない。

既にこの節の初に述べた如くに、M及びSがそれぞれ根本史料で、それからそれ／＼他の二つのものが作られた場合も方法的の取扱は全く同じであつて、この場合常に只吾人が記述し、また認識するを得た三つの可能が問題になる。

一般的には、三つの親似史料中二つが互に全然第三者との相違の點で一致してゐる場合、二つの史料の一方は他の史料であり、また之に第三者の報告を傳ふるものである。然し二つの何れが媒介史料なるかはaの取扱によつて決定さる可きものであるといはれ得る。

この外に三つの關係の結合もある。假令ばSが直接にEから作られてゐるが、この外にSがまたMを利用し、EにあるMの媒介的報告によつて他と結合されてゐることを見る。かゝる二重關係はこの節の初に述べた如く、SがMよりSに近い結合を有する文句の外に、なほSがEよりもMに近い結合を有する文句をも發見することによつて認められるのであつて、假令ば紀元一〇八五年の條に於ける如きものである。

E	M	S
<p>Ilthirandus papa, qui et Gregorius septimus, apud Salernum mortui et ibidem in ecclesia sepeliuntur: cui Northmannorum et Malchididis illius potentissime per Italian feminæ cunctorumque eiusmodi sectam acutissimum assensu Desiderius, cardinalis Romanus et abbas Cassinensis, verus Christi famulus, licet multum corde simul et corpore renitens, substituitur: sed cum infirmitate gravi Calorans usw.</p>	<p>Ilthirandus, qui et Gregorius VII, apud Salernum exulatus mortui et ibidem in ecclesia sepeliuntur: cui Northmannorum et Moebididis potentissime per Italian feminæ cunctorumque eiusmodi sectam acutissimum assensu Desiderius, Cardinales Romanus et abbas Cassinensis, verus christi famulus, licet multum corde simul et corpore renitens, substituitur: Victor nominatus, eorum cum infirmitate gravi laborans usw.</p>	<p>Ilthirandus papa, qui et Gregorius VII, apud Salernum exulatus mortui et ibidem in ecclesia sepeliuntur: cui Northmannorum ex Apulia et Malchididis potentissime per Italian feminæ cunctorumque eiusmodi sectam acutissimum assensu Desiderius, cardinalis Romanus et abbas Cassinensis, divialis Christi famulus, licet multum corde simul et corpore renitens, substituitur: Victor nominatus, eorum cum infirmitate gravi laborans usw.</p>

Eに對するMとSとの共通の相違は非常に漠然としてはゐるが、二つのものが偶然に第三者に相談といふことは可能として考へられない。従つてこの場合SがMなるものを自分の前に有つてゐたと考へることは可能である。

古代文献の範圍に於けるかゝる現象を報告してゐるのはエフ・リールが出版したアー・フォン・グットシュミットの小論文 Von Gotschmid, Kleine Schriften 紀元一八八九年卷一、第十九頁である。明瞭な例は紀元一八三〇年のザルギー憲法と今のプロシヤ憲法及び紀元一八四九年のドイツ憲法との無數の個々の條の比較である。最後の二者は最初のものから作られたのであるが、その外に彼等の一致してゐる詞が示してゐる如く彼等は決して互に獨立してゐるものではない。

(2)史料の一つが他の二つのものから作られた場合。吾人は説明を判り易くする爲に、一方の史料をN、他方の二

つの史料をYとZと名付けるが、その關係が圖表的には次の様に現はされる。



吾人はこの關係を如何に認識するか。

先づ前に述べた三つの關係の可能を推論することにより關係に、またことに次の方法によつて。

彼處に與へられた場合の第一でないこと(YとZとがXから作られてゐないこと)は、aの證明手續からして、Yも、ZもそれぞれXに對して原史料として現れてゐることである。之によつて直ちにZ或はYが互にXからの媒介によつて作られたといふ可能が結論される。——(かゝる限定によつて)彼處に與へられた場合の第二でないこと(YがZの媒介によらずしてYの報告を有すること)は、bの證明手續からして、XはZが之に與へ得べき形式でYの報告を與へて居らず、却てそれが同じ事實であるならば、Yに非常に近い形で與へてゐるといふことによつて生ずる。——而して彼處に與へられた場合の第三でもないこと(XはYの媒介によつてZの報告を有たないこと)は同様に生ずる。

その外、Xが或はYの報告、或はZの報告を含むが、YとZとは常に全く互に違つた報告を含むことによつて、直接に有力な關係が認められる。吾人はXが土臺にあつてゐる史料であつて、それからYとZとが作られたと假定せんとするが、この場合かの事實を説明する爲には、正しく常にYがZの排斥してゐる報告を前史料Xからとり、また反對にZはYが排斥してゐる報告を取つたと假定せねばならない。之は非常に度々現れる偶然ではあるが、た

えず繰返されるものと考へらるべきものである。更に上記の事實に面してbに述べた親似關係のあるものがあることの假定は不可能である。この場合常にYからの報告がZに、或は反對にZからの報告がYに發見されねばならないからである。

最後にXが關し事實を二回違つた形式で取つて居り、即ち一回はYの形式で、一回はZの形式で取つてゐる場合は、之があれば欺く可らざる直接の徵證であるが、之は非常に偶然的なものである。之は當然只輕率から、不注意から生ずるのであるが、然し尠大な編輯の際には全然稀ではなく、假令ばザクソン年代記が一回はブランデンブルグ征服の報告を紀元一一〇〇年の條にMの形式で、而して今一回紀元一一〇一年の條に他の史料の形式で取つてゐるが如きことを見る。リビウスはその書第十卷第一六―二三頁にサムニット人とガリラヤ人との恐ろしい同盟をば種々なる史料により三回まで物語つてゐる。かゝる徵證は史料に於てかゝる二重物を發見する場合、若し利用された史料を知らず、或は全然最早之を有せない時には、之が編輯物であると結論し得る程に有力である。

編纂の際に二重物が成立する種類の教訓的なものは、ゲツチンゲン王立科學會研究紀元一九〇〇 N. F. 號卷三第三號第一九三頁にあるハー・アヘリスの殉教者帖、その歴史と價值 H. Achelis, Die Martyrologien, ihre Geschichte und ihr Wert. S. 97 究である。

吾人は一般に三つの親似史料の中、一つの史料が二つの他の史料に對して、此等二つのものからの報告を指示し而して此等二つのものが全く互に違つた報告を含むと主張する場合、かの史料は此等の後の二つのものから編纂されてゐるといひ得る。

吾人はこの際常に二つの根柢となつてゐる史料Y及びZが互に獨立してゐるといふ假定から出發するものである。この假定は大抵の場合に適中してゐるのである。然しこれが場合でなくして、三つのものが共通の一つの史料を有し、或は一方が他方から利用されてゐることが生ずる。假令ばザクセン年代記がエツケハルト及びマグデブルク年代記から作られてゐるが如きである。然し此等の二つのものは互に獨立のものではなく、却てマグデブルク年代記は自分の方でもエツケハルトを寫してゐるのである。かゝる場合、勿論上に擧げた直接の標準は關係の認識を消滅せしむる。之は今M及びEに於いて屢々多少違つてはゐるが、同じ報告を現すからである。故に吾々はある間接な取扱により、一步々個々の史料相互の關係を解剖し、而してことにそのある關係の存在を發見した後に、かの編纂の假定による以外には、その相互關係が説明され得ない文句が残るといふことによつて二重關係を認識すべきである。かくて假令は吾人ばa及びbに與へられた取扱によつて

EはSに獨立か

EはMに獨立か

SはEとMとから引用したか

を確定する。さて吾人はなほ密接に互に一致してゐる文句をMとEとに發見するならば、EとMとの關係を更に完全に研究し、また勿論その外になほ

MがEから引用したか

を確定するに至るべきである。

(C)三つ以上の史料の間の關係 多數の史料が互に關係を生ずると、當然無數の違つた結合が可能であり、またことに之が吾人が第三章に取扱ふべき筆蹟の復本及び復々本に於て實際に現れる。然しこの關係は常にa及びbに取扱はれたことに遡るのであり、漸次解剖的に認識される。かくして假令ばエツケハルトは幾多の年代記から書寫きされてゐる。

E
St P S M

吾人はかの個々の史料と他のものとの關係をaの指示により、或は常に各二つと第三者との關係をbの指示に基づいて研究することによつてこの關係を認識する。假令ば他方ザクセン年代記は多數の年代記から編纂されてゐる。

P J K N M E
S

吾人は此等のものをaの指示に基く二つの史料の觀察により、或はbの指示に基く三の史料の觀察によつて認識するを得る。

吾人は之によつて中間聯絡、分岐、二重關係等によつて非常に複雑であるとも、總ての關係に復歸すべき二つの根本形式を與へた。吾人は殊に、一つを他のものより、またそれから全體を認識する爲には、上に擧げた方法によ

つて種々なる結合はそれらを結合してゐる個々の關係に分解するより他の方法はこの認識の上に認められない。然しこの方法は必要の條件の下には更に非常に混雜してゐる結合すらも説明するに足るのである。之に關する例は次節d及び第三章に含まれてゐる。

(d) 失はれた史料の證明 吾人はこの研究の經過の中に既に度々、提出されてゐる史料の中にはかの提出されてゐる本文を検査すれば之を作り上げた史料の痕跡が、必らず發見されるものであるといふことを述べた。この根柢となつてゐる史料が時の不幸の爲に失はれた場合、かの痕跡によつてその失はれた史料の面影を發見せねばならない。ことに編纂者がかなりその前史料を變更しないで引用して居つて、内容上の相違によつてこのものが明白な場合の如き特に都合の状態に於いては、失はれた史料の部分たる全文をその編纂物の中から引出すことが出来る。かくて假令はザクセン年代記の中にあるコンラット三世王の選舉及び彼とウエルフエン家との争を見ると文章は變つてゐるが特に紀元一一三八年及び紀元一一三九年の條に於て、極端なウエルフエン的な史料とまた明白にスタウフエン的な史料との引用物であることが認められる。

然し吾人は吾人に提出されてゐる多數の史料の中にその痕跡を發見し、また追及し得られる場合は、かゝる失はれたる史料の證明は非常に有効であり、また意義深いものである。この證明は直接にa及びbに書いた類似史料を支配する關係の認識法によつて結論される。吾人が親似のものとして認める二つ或はそれ以上の史料を有する場合、此等のものが互に直接に關係がなく、従つてその親似の總てのものが復寫された共通な史料から説明されねばならない場合は、かの方法によつて確定せねばならない。吾人はまたこの方法によつて、もしEが手許にない場合にもこの關係の存することを認むるのである。

E
┌ St P S M

一般にEが失はれたと假定すれば、同様にM、S、P、Stの關係してゐる或る史料Xが存在したに相違ないことが認め得られる。然し吾人はかゝる漠然たる認識に満足してはならない。引用した史料が失はれた史料をかなり變更なく寫してゐる場合、必らずその一致してゐる部分から前史料の性質及び内容を明かに認め得べく、且つ引用史料の一致してゐる引用よりしてその失はれた前史料を幾分復舊することも考へ得られる。

この方法は常に正しく史料を文字通りに寫すことが習慣である時代、半ば古代、また更に一層中古の時期には最も確實に利用せらるべきである。

先づこの方法は現存してゐる復本の原型及び前史料が失はれてしまつた場合、その筆蹟的校正には制限された方法で利用されねばならない。之を史料解剖に應用した最初のものにはゲー・ワイツであつて、彼は古代ドイツ史學會報紀元一八三八年卷六第六六三頁に、ヒルデスハイム、ケエドリンブルグ、ワイセンベルク及びヘレスフェルド・フォン・ラムベルトの年代記に、總て紀元十一世紀の總てのものはある共通の史料から復寫されてゐることを示し、ことにワイツは之が失はれたヘルスフェルト年代記であることを示すのみならず、更に上記の四つの年代記の各二つづゝの密接な親似よりして二つの最後に挙げたものは失はれたヘレスフェルド年代記の簡單な修正本を利用したものに相違ないことを證明した。この證明は更にオー・ホルダーニツガーによつて完成された。之については紀元一八九四年版のラムベルト年代記(教科用ドイツ誌文集)のオクタブ版第三六頁を

参照するを要する。ウエー・ギーゼアレントが後世史家の引用からして紀元十一世紀のアルタイヒ的年代記を紀元十一世紀の歴史の史料文書アルタヘンセス年代記 W. von Giesebrecht, *Annalen Althheues, eine Quellschrift zur Geschichte des 11. Jahrhunderts* 1841 なる書物に復舊したことは有名なことであるが、この作業の主要結果として紀元一八六七年、この年代記の再発見を爲すに至り、確定的になつたことは顯著な事實である。ウエー・ワッテンバッハの中古ドイツ史料第六版、紀元一八八六年卷二第二三頁を参照せよ。この種の最輝かしい仕事はパウ・シエツフェルボーホルストのそれで、この人は紀元一八七〇年に「紀元十二世紀の失はれた史料バーテルブルンネン年代記」といふ作物の中に、主としてヒルデスハイム、ケルン年代記及びザクセン年代記が一つの失はれた史料を共通に利用して居ることを證明し、また彼はこの一致してゐる文句からして性質、前後關係、今日常に彼によつてバーデルボルン年代記として記されてゐる個々の史料を認め、かくて彼はこの認識によつて十分な程度に援助されて、此等の引用的年代記からしてその失はれたバーデルボルン年代記に屬するものを綜合するを得た。爾來中古の失はれた史料の證明と復舊とは殆んど精妙な技術に完成された。古代歴史の範圍に於ても、ことにローマ年代記に於てはこの證明が重要な役目をなしてゐる。然しこゝには非常に都合の好い状態が取扱はれず、従つて大抵は非常に十分な、また問題のない結果には到達しない(後に述べる一般の注意、ツエー・ワックスムットの古代史研究序説 C. Wachsmuth, *Einführung in das Studium der alten Geschichte* 1873, の第五五頁及び紀元一八八九年エフ・リールの出版したアル・フォン・ゲットシュトのの小論文卷一第二頁にある紀元一八七七年エナでなされた彼の就任演説並にこの點について中古及び古代史緒學の間の區別を著しく止揚してゐるその他の作物を比較せよ)ことに、吾人は古代史料研究に際し只一つの保存されてゐる作物を取扱ひ、それからして或利用された史料を認識すべきことが問題になる。過渡時代については復舊の立派な例として、イタリヤのコンスル表のそれが告げられてゐる。之についてはドイツ史料、俗年代記四一五、紀元一八九二年卷一第二五一頁のテオドル・

モムゼンの文を参照せよ。後世の文書から失はれた史前料を推論する無數の例については、エドワード・ステンデルの紀元十一十二世紀のドイツ諸王の特殊文書 Ed. Stengel, *Die Innhaltsverzeichnisse der deutschen Könige vom 10-12. Jahrhundert*, Dissert. Berlin 1902, を参照せよ。どこまでも必らずこの方法によつて、失はれた史料の最複雑な關係にあるものの痕跡を發見し得べきかについては、失はれたニンブルグ年代記の證明及びその綜合が説明し得る所である。このものにはマゲテブルク年代記及びゼクセン年代記の利用が認められたが、此等の年代記はその外に然かもそれらのものが半はニンブルク年代記其物からも引用して居り、また半は失はれてゐる共通の多數の年代記を引用して居り、またザクセン年代記にはその外に失はれたバーデルボルン年代記、失はれたハルベスタット及びイルゼンブルグ年代記、また失はれた傳説的な諸帝年代記からの引用が挿入されてゐるのである。かくしてザクセン年代記の中に五つの種々な知られない、失はれた史料作物が別々に認められ、また決定さるゝを得た。ツエー・ギエンテルのマゲテブルク大儒正年代記 C. Günther *Die Chronik der Magdeburger Erzbischöfe*, Dissertation, Göttingen 1871, ドイツ史研究紀元一八八一年卷十一第四八五頁にあるペー・シエツフェルボーホルストの文、古代ドイツ史學會新報紀元一八八八年卷十三第三三頁にあるエル・フォン・ハイホマンの失はれたザクセン年代記の研究によつて L. von Hehnemann, *Über ein verlorenes sächsisches Annalenwerk* ペー・ツマのバーデル年代記の史料として G. イゼンブルグ年代記 IL Herre, *Isenburger Annalen als Quellen der Pöhlde Chronik*, Dissertation Leipzig 1890, エル・バーネルトのリーニンブルク年代記等に關する研究 R. Sietert, *Untersuchungen über die Nienburger Annalistik* usw., Dissertation Kassel 1896, (吾人の問題を單に是認してゐる)

かゝる研究の根柢をなしてゐる敏感と、また實に史料の間のある關係を正當に説明し得ない困惑とに對する刺激が、近來往々にして之に關する十分な理由の存することなくして失はれたる史料を假定するに至るが、提出されてゐる史料の關係が絶対に失はれた史料の存在を指示し、然して全くこの外に説明されない場合にのみ、明かにこの

假定を採用し、またその證明を企つべきである。その後失はれた史料の痕跡が発見されると考へられる史料が完全に獨立してゐることを確定せねばならない——實に之は總ての取扱の唯一の確實な根據である。更に先づ明白に一致してゐる文句のみが失はれた史料の引用として要求されねばならず、而して史料の特有の性質を認識すべきかゝる十分な材料が得られた場合に初めて、必らず引用した史料の一つにのみ存し、またその認識した特性によつて明白に失はれた前史料への從屬物たるを示す文句の復舊を要求すべきである。かゝる特性といふのは明かに利用されてゐる史料の言語及び文體から引出された表現法、或は單に失はれた史料からのみ利用されてゐて、拔萃された史料からは利用されてゐない拔萃物に於ける他の史料の明白な出現、或は地方的性質のものであれ、事實的性質のものであれ、利用した史料と明白に違つてゐる特殊關係、或は最後に大體政治的黨派、時々宗教的、科學的、藝術的傾向或は智識階段を取扱つてゐる明白に違つた觀察法である。

この種々た見地の利用に關する例は上述のシェツフェルボイホルストの文及びアー・フォン・グットシュミードの紀元一八七七年のアカデミー就任演説彼の小論文卷一(O's Kleine Schriften 1889)にうまく一緒に發見されるが、後者は殊にその第二五頁に於いて不確實な根據の上に作業することを警告してゐる。

この方法の有効な取扱は確かに敏感によるは勿論、また要心深い思慮に待つべきものである。

吾人は第四章第一節C及び第二節に於ける説明を反覆しない爲に、こゝには只簡單にその意義及びその結果に觸れるが、之は失はれた史料に關する鋭敏な研究は精神的遊戲であると考へられない爲である。假令は吾人が紀元十六世紀のバイエルンの歴史記述家の紀元十一世紀の經過に關する報告があり、之が非常に後世の作家の詞によれば、確

實と思はれないものであるが、アルタヘネス年代記の場合に於けるが如く第一等の同時代の報告たることが證明し得る場合、之は非常に價值あることである、また民族移動時代の半ば不確實な、半ば破壊されて傳つてゐる年代記の混亂してゐる覺書が公な朝廷年代記の拔萃として認められ、またコンスル表の場合に於けるが如くに根本形式の復舊によつて確實な排列を生ずる場合も同じである。また紀元五世紀のスルピシウス・セベルスの年代記に、エルザレムのユダヤ神殿の焼失に關してヨゼフスの報告とは非常に違ふ疑はしい文句が書かれてゐるので、失はれたタキツスの歴史の部分的拔萃たることが證明され、また之に依つて第一等の證據物に高められた場合も同じである。またザクセン年代記の紀元一一三八年及び同一一三九年の王位戰に關する混亂せる叙述は二つの報告に分たるべく、その各が相反せるの黨派的立場に立つて之を物語つて居つて、殆んど不用な混亂せる一つの叙述に代つて相互に復舊し、また補足する二つのものが得られた場合も同じである。而してことにこの方法は正しく文學的構成の低い時期（この時代は奴隸的に複寫されるから）かくて吾人の有する比較的乏しい報告が吾人に取つて非常な價值のある時期に於いて最も有効に利用される。吾人がその報告をばその根本の前後關係に復歸するを得る場合は之を二重に貴重ならしめる事情である。

殊にこの取扱は傳説、歌謡、習慣法等の如き記述されざる本來の形式が失はれた史料と考へられる言語的傳説の範圍に非常な重要な利用を見るのであつて、吾人に知られてゐる文學的に確定されてゐる引用によつてその失はれた史料に溯り、また之によつて種々なる引用の關係を説明し得るのである。

近代の童謡の種々なる形式から古い民謡の進推の立派な例はウニ・ハー・ミールク U. H. Mierck がその下ドイツ言語研究會

報告紀元一八七八年第一卷第七頁に述べて居り、更にニー・ペルンハイムが民俗學會雜誌紀元一八九六年第二〇九頁に補充してゐる。傳説については第一章のCを参照せよ。法律發展の範圍についてはコリウス・フィツケルが屢々上に記した作物に大仕懸でこの方法を使用してゐる。

先きに假定された状態、文化階段、制度の形式、習慣等の認識も、後の形式上或はなほ現存する形式の一致せる傾向からしてその本來の形體及び史料を結論することによつて、同じ方法によつて得られるものである。

吾人は二三の一般的注意によつてB節に於ける方法の敘述を補充しなければならない。

吾人はこゝにこの方法の最も印象的な、最純粹な利用形式を記述した。どこまで之がかく純粹に應用されるかは當然史料が忠實にその前史料を復寫した工合の多少による。何となれば全體の方法は實に只寫手及び修正者がその前史料に對して取つた經驗的觀察に基づき、而してこの觀察は前史料の幾分文字通りの復舊に際して最明瞭なことは、既に見た通りである。前史料の復舊の種類はAの所に述べた如き方法により、同時に史料解剖のそれら部分に取つては、取扱はるべき史料の個性の現實化が最も重要であり、これによつて豫め正當な豫定を以て研究に入り、また必要な前提を缺く結論の強制より免れるを得る。この場合どれだけ史料の個性に關する見解によるべきかは、假令ばローマ及びギリシヤ史家が如何にその史料を利用したかの種類に關してローマ史の範圍の研究中に於ける論争に見られる所であり、或者は前史料に當時の書物の卷物形を草稿に變更する困難の前に、またリビウス及びポリビウスが文句通りに寫した方法の前に、かの古代史家が常に大部分繼續的にかゝる前史料を利用したといふ原則が立て得られると考へ、またかの歴史家が採用した作業態度の原則からして、同じ關係せる部分にある個々の文句に

ついては明かにある前史料から引用されてゐる場合、この前史料が全體の部分の史料として假定されべきであると結論してゐる。他の研究家はこの假定及び結論に反對して之を語らない考であるとして取り合はない。實に史料解剖の結果は之に關する記述家の個人的作業態度、種々な見解によつて種々違つて來ることが判る。

更に決して一つの文句、或は個々別々の文句からして史料の間の關係の種類を輕率に結論すべからざることを非常に重要な法則として主張せねばならない。假令一つの文句がその關係を示すほどに絶對に確實に現れないでもないが、それは只その文句だけに當てはまることであつて、決して全體の史料には當てはまらない。實に吾人は既に見た如く、第一には或文句から、或は勝手に取出された文句からは決して認められ得ない二重關係なるものがあり得、また更に同じ作物の中で關係が根本的に變化するを得ることは、假令ば初はこの年代記或はかの他の年代記から作られ、漸く後に獨立になるのは中古年代記に、屢々見られることである。かくて一つの明白な文句から引かれ得る結論が全然有力な關係の説明を果し、また十分に保證し得るかを鑑査する爲には常に全體を注目せねばならない。提出されてゐる史料がそれから確實な結論を引出し得るほどに作られてゐるか、その一致がAに於ける吾人の取扱に従つて概して親似の證明に必要な條件を示すが、殊に比較材料が十分豊富であるか、至る所また絶えず明かに考へねばならず、また一步步々總ての結論を要心深く、また注意深く鑑査しなければならない。

此等總てのものは非常に明白に思れるのであるが、非常な敏感にも拘らず、近來正しく個々に於て、全關係に於て、十分な結論の論理的及び實質的條件に於て、之によりて到達するべきものの思慮深い判定を忘れることによつて、屢々非常な間違が行はれるのである。デニー・モノーは非常に巧に上述のカロロ家の歴史史料に關する考證的研究 G. Monod, Etude critique sur

Les sources de l'histoire Carolingienne にかゝる墮落した敏感をば「この癖は更に永久に問題とするに足らない。かく論議の細心と假定の想像を混することは考證的方法其物に關する不信を損ずる爲になされてゐるものである。」といふ詞で現してゐる。又アー・フォン・グットシュミードは先に述べた彼の論文集卷一第二八頁にこの種のある研究に關して「改正を要するものはこの方法ではない。私は寧ろこれまでの史料研究の結果の少い主要の理由は先づ之と關係せる材料の不幸な選擇に到達さるべき確實の程度以上の廣い自己欺瞞である」といふてゐる。正しくかゝる鑑査なき敏感の典型的な例を古代ドイツ史學會新報紀元一八九四年刊卷十九、二〇、二一のニフ・クルツエのカロロ家年代記に關する研究、歴史季刊誌紀元一九〇〇年卷三第九九頁のモノの上記の書に對する私の批評及びハー・ブロッホの上に述べたゲッティングン學術指針、紀元一九〇一年卷十一第八七八頁の評論が擧げてゐる。同じ欠點がヨット・エル・デートリツヒの紀元十一世紀中期に至るライヘナウ僧院の史料 J. R. Dethlefs, Die Geschichtsquellen des Kloster Reichenu bis zur Mitte des II Jahrhunderts 1897. にあり、私は之を史學雜誌紀元一八九九年 N. D 卷四七第二九六頁にある修正に於て示してゐる。またデートリツヒの新書ドイツ中世の文書及び史料學の爭議 Streiffrage der Schrift- und Quellenkunde des deutschen Mittelalters 1900. 第六頁の論文も何等變つてゐない。彼の連斷的結論法について、近來ハー・プレスラウが古代ドイツ史學會新報紀元一九〇〇年卷二五第十三頁及び紀元一九〇一年卷二六第二四五頁註等に立派に記述してゐる。こゝには其他度々失はれたる史料について不十分な理由に基く假定をも取扱ふてゐる。

かゝる誤謬に對しては、先づ一般論理的教育が先きに方法學が與へ、またこゝに研究された如き適當な範例によつて明白ならしむるを得る基礎形式及び基礎條件の概觀的知識を保護する。其他先に方法學について一般に言はれた所は史料解剖の全體の敘述に特別に有効である。之は總て個々の場合に利用され、更に總ての史料種類に應用する。

其弟者、欲取奕吾貨物、傍有一人云、此是他姓人、詐稱其弟、或曰眞弟、未知其眞贋、可奈之何乎哉、不若令奕吾貨物、藏於吾府庫裏、待奕吾眞子來矣、先是、辛亥歲安歲人黃龍興適來此地、是我相識也、奕吾眞子與黃龍興俱共同來、令此貨物、逐一與之、不差毫釐、眞子亦勿疑吾言、伏乞昭察、

癸丑正月廿八日

與大明福建軍門書

琉球國王尙寧上書

大明國福建軍門大人閣下

恭審小邦去日本薩摩州者、僅三百餘里、以故三百年來、以時獻不腆方物、修其隣好、頃有不肖裔夫、緩其貢期、是故薩摩州進兵於小邦、々々荒墟者、誠天之所命、而我亦以無苞桑之戒也、不幸而爲其俘囚、在薩摩州者三年矣、州君家久

公、外好武勇、內懷慈憫、待我以待貴客之禮、

々遇之厚者、三年一心、加之送還我於小邦、於是吾民之歌於市、枹於野者、茲非幸歟、州君寄言於我、其之言曰、夫邦國在四方也、有金玉者、不足乎錦繡、有粟米者、或不足乎器皿、若有餘而不散、不足而無聚、民用不足、而其貨亦腐、惟坐而待腐、不如通其有無、各得其所矣、日本非無金玉器皿、其土宜質素、而不及於中華之文質彬彬、是故使我參謀於兩國、一以使日本商船、許以容之大明邊地、二以使大明商船來我小邦、交相貿易、三以使一遣使、年々通其貨之有無者、匪翅富兩國人民、大明亦無爲倭寇嚴備兵衛矣、三者若無許之、令日本西海道九國數萬之軍、進寇於大明、々々數十州之隣於日本者、必有近憂矣、是皆日本大樹將軍之意、而州君所以欲通兩國之志者也、伏冀

軍門老大人、於斯三者許一、於此我小邦、大沐